

訳註『説文解字』序（Ⅰ）

遠藤 昌弘

A Study of “Shuo wen jie zi xu” (I)

Masahiro ENDO

目次

0. はじめに
1. 漢字の起源―庖犧・神農・倉頡の伝説
2. 「文」と「字」の区別、六書について
3. 指事について
4. 象形について
5. 形声について
6. 会意について
7. 転注について
8. 仮借について
9. 始皇帝の文字の統一以前のようす
10. 始皇帝の文字の統一について

11. 小篆のその後と、秦書の八体について
12. 書のはじまりと漢の官吏の教養について
13. 前漢末から新にかけての文字の継承
14. 新の六書について
15. 許慎のころの文字の理解への批判
16. 文字学の迷走
17. 『説文解字』を執筆するにあたっての許慎の心構え
18. 『説文解字』の本文の構成と参考文献

0. はじめに

0. 1 許慎『説文解字』

最古の漢字資料である甲骨文は前十四世紀までさかのぼることができる。そこから約千五百年の後に許慎が書いた『説文解字』は、漢字

を研究した現存最古の字書である。『説文解字』は、九三・五三の漢字を五四〇の部首にわけ、それぞれについて字義と字形を解説し、部分的に音の説明も付加している。『説文解字』の五四〇部首は、今日使われている漢字字書の祖である『康熙字典』の二一四部首よりは遙かに多いが、その部首による分類方法は時代を経て踏襲され、またその解説は漢字研究の原点である。現在見ることでできる最古のものは、唐写本の『説文解字』の残卷(図01a)である。

『説文解字』の研究は、十世紀ころの徐鉉・徐鉉の兄弟による成果を出発点とし、現在行なわれている『説文解字』のテキストは徐鉉の校訂による雍熙三年(986)刊本に基づいている。十五世紀から十七世紀には「実事求是」のもとに始まった考証学は、典籍全般を校訂しようとするものである。考証学における典籍研究は、文献を中心とする検討から更に進めて、実際の古代文字そのものを研究するための「金石学」という新しい学問領域を創出した。「金石学」は古代の青銅器や石碑の文字を研究するもので、こうした趨勢は『説文解字』研究を基礎に展開された。十九世紀初めには段玉裁(1735-1815)・桂馥(1736-1805)・王筠(1784-1854)・朱駿声(1788-1858)らが優れた研究を残した。とくに段玉裁(図01a)が著わした『説文解字注』(図01b)は、諸説を検討統合して画期的な業績を挙げた。これが現在もつともひろく使われている「段注説文解字」と呼ばれるものである。

本編の訳註にあたり、汲古閣平津館叢書本『宋版説文解字』をテキストにした。汲古閣は、明代の蔵書家として有名な毛晋の閣号で、五

次にわたり『宋版説文解字』を出版した。最後の第五次本は広く流布し、清になるとさらに考証学者の孫星衍(1753-1818)が覆刻した。平津館は孫星衍の館号で、汲古閣平津館叢書本『宋版説文解字』と呼ばれて『説文解字』のテキストとしては最善のものである。

0.2 『説文解字』を著わした許慎について

許慎の伝記は、『後漢書』儒林伝に述べられている。

「許慎。字は叔重。汝南召陵の人なり。性は淳篤なり。少くして経籍に博學なれば、馬融常にこれを推敬す。時人これが為に語りて曰く。五経無双の許叔重、と。郡の功曹となり、孝廉に挙げられ、再遷して汝の長に除せられ、家に卒す。初め、慎、五経の伝と説の臧否同じからざるを以て、是において撰して『五経異義』をなし、又『説文解字』十四篇を作る。皆世に伝ふ。」

ここでは中国歴史書における人物伝と同じ構成を採る。「姓は許、名は慎、字は叔重。汝南郡召陵(現在の河南省鄧城県)の出身である。その性格は、淳篤(真心があつて、人情にあつこと)である。若くして経籍に博く通じていたので、馬融(79-166)から尊敬されていた。人々からは「五経無双(注1)の許叔重」とよばれた。郡の役人である功曹、孝廉となつて、ふたたび汝の長に任命されて、郷里で死んだ。五経の伝と説に問題点があつたので『五経異義』を著わし、又『説文解字』十四篇を著わした。」以上が大意である。

許慎の生卒は、はっきりしない。ただ『説文解字』の完成は永元二年(100)、朝廷への献上は建光元年(121)のことで、また『後

漢書』西南夷伝の文中に許慎の記述があり、桓帝（在位147～167）の時であったことから、だいたい一世紀から二世紀の頃にかけて活躍したと考えられている。

（注1）「五経無双」は、「学問に精通して、双ぶもの無し。」ということで、許慎を誉めたたえている。五経は、『易』『詩経』『書経』『礼記』『春秋』のこと。

0. 3 『説文解字』の目次

全部で十五篇。第一篇から第十四篇までは、漢字九三三三字を部首五四〇部にわけ、それぞれについて字義と字形を解説し、音の説明もくわえたもの。第十五篇は許慎の序文になっている。

『後漢書』儒林伝中の『説文解字』十四篇というのは、序文である第十五篇をのぞいたものと考えられる。

0. 4 『説文解字』序の内容

許慎の序は、『説文解字』の巻末の第十五にある。これは広く文章の冒頭に置かれる序に対して後序と呼ばれるものである。その内容は、次ぎの五段に分かれる。①漢字の起源、②漢字の成り立ち、③その後の変遷、④『説文解字』を著わすにいたった理由、⑤『説文解字』を使うための留意点。

①漢字の起源は、庖犧や神農といった中国古代の神が登場する内容である。今日からみれば、まったくの伝説といって良いものである。

②漢字の成り立ちは、六書（指事、象形、形声、会意、転注、仮借）



図12a



図01b



図13a

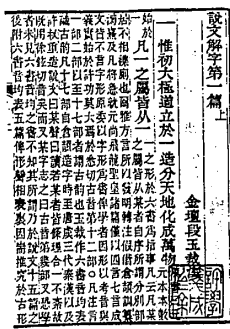


図01c



図01a

によって説明する。この考え方は、今日でも、漢字の成り立ちを説明するのに使われるたいへん優れた方法論である。

③その後の変遷は、篆書(大篆・小篆)、隸書、草書などの書体の多様化を説明する。ほかに刻符、虫書、■印、署書、爰書の書体について取りあげている。

④『説文解字』を著わすにいたった理由は、許慎のころ(だいたい一世紀から二世紀)の漢字の解釈への誤を指摘し、正しい解釈の必要性を説いて、『説文解字』の重要性を高めている。

⑤『説文解字』を使うための留意点を述べ、本文中の解説の出典について明らかにする。出典は、古文によって書かれた『易』『書経』『詩経』『周礼』『春秋』『論語』『孝経』としている。

1. 漢字の起源—庖犧・神農・倉頡の伝説

1. 1 『説文解字』序の本文……

「古者庖犧氏之王天下也。仰則觀象於天、俯則觀法於地。視鳥獸之文、與地之宜、近取諸身、遠取諸物。於是始作易八卦、以垂憲象。及神農氏結繩為治、而統其事、庶業其繁、飾偽萌生。黃帝史倉頡、見鳥獸蹏迒之迹。知文理之可相別異也、初造書契。百工以乂、萬品以察。蓋取諸夫、夫揚于王庭。言文者宣教明化於王者朝廷。君子所以施祿及下、居德則忌也。」

訓読……

「古の庖犧氏、天下に王たり。仰ぎて則ち象を天に觀、俯して則ち法を地に觀る。鳥獸の文と地の宜を視、近くは諸を身に取、遠くは諸

を物に取る。是に於いて始めて易八卦を作し、以て憲象を垂れり。神農氏の結繩して治を為し、而して其の事を統ぶるに及びて、庶業は繁を其め(注1)、飾偽は萌生せり。黃帝の史の倉頡は、鳥獸の蹏迒(注2)の迹を見る。文理の相い別異す可きを知れば、初めて書契を造くる。百工(注3)は以て■まり、萬品は以て察せらる。蓋し諸を夫(注4)に取り、夫は王庭に揚ぐ。言はく、文なる者は教を宣べ化を明らかにするを王者の朝廷に於いてす。君子は祿を施どこして下に及ぼす所以にして、徳に居れば則ち忌む也と。」

(注1) 段注に「其は、綦に同じ。なお極のごとし。」とあるに依る。

(注2) 蹏迒は、蹏はあしあとのこと、迒は獸跡のこと。

(注3) 百工は、百官のこと。

(注4) 夫は、三三『易』の六四卦の一つ。小人がすくんで、君子が伸び出る様にかたどる。

訳解……

「むかし庖犧という神は、世界を支配していた。庖犧は、天を仰いで天象をながめ、地を見て地上の理をながめた。鳥や動物の姿かたちや地上の美しさを見て、こうして近くは自分自身で知り、遠くは自然のなかから悟った。そこで『易』の八卦(八種類の占いの標)をつくって、その教を人々に示した。神農という神が、繩を編んで結繩をなし、さまざまな事を治めようとしたが、かえって混乱して、偽り飾ることが始まった。黃帝という神の役人であった倉頡は、鳥や動物の足跡を見た。そこで諸事の区別ができることを知ったので、はじめて書契(文字)をつくった。役人たちの仕事は行なわれ、万事は明らかになった。

思うことには、易の夫卦の意味をとって、朝廷に宣揚する。言うことには、文というものは朝廷において教化を宣明にすることである。君子は恩恵を庶人に施す理由であり、一人君子のみが恩恵を独占することとをしないのである。」

1. 2 庖犧、神農、黄帝、倉頡について

庖犧は、伏羲、炮犧とも書かれる。中国古代の伝説上の神、百五十年のあいだ在位したと伝えられている。

神農は、庖犧をついだ中国古代の伝説上の神、火を支配する神で炎帝といわれる。はじめて人民に農業を教えたので神農と呼ばれ、また医薬の神ともされる。

黄帝は、軒轅氏けんえんしとも書かれる。中国古代の伝説上の神、暦算、音楽、文字、医薬などを創始したといわれている。土、中央を支配する。

倉頡(図12a)は、蒼頡とも書かれる。

庖犧、神農、黄帝、倉頡は、のちに肖像も描かれたが、もちろん想像によるものである。

1. 3 八卦、結繩について

八卦(図13a)は、いわゆる「あたるも八卦、あたらずも八卦。」の八卦で、易者の判断の道具になっているが、その起源は中国にあって、ふるく紀元前七百年まえにさかのぼると言われる。内容は、王が天の声を聞くための、たいへん厳肅かつ神聖なものであった。「卦」とは神の意志をもつもので、このため『易』(または『易経』ともいう)

は、古来より重要な書物として扱われてきた。

結繩は、繩を結んで意味を持たせたもの。古代中国のほかエジプト、チベットでおこなわれ、近年までペルー、ハワイ、沖縄で存在していた。

2. 「文」と「字」の区別、六書について

2. 1 『説文解字』序の本文……

「倉頡之初作書。蓋依類象形、故謂之文。其後形声相益、即謂之字。

(注1) 字者言孳乳而寢多也。著於竹帛、謂之書。書者如也。以迄五帝三王之世、改易殊体、封于泰山者、七十有二代、靡有同焉。周礼八歲入小学、保氏教国子、先以六書。」

(注1) 段注本は「即謂之字」の後に「文者物象之本」を加えるが、他の諸本にこの六字はない。段注には『左伝』に依るとする。訓読……

「倉頡初めて書を作す。蓋し類に依りて形を象どるなり、故に之を文と謂ふ。其の後形声相益せば、即ち之を字と謂ふ。字なる者は孳乳して寢く多きを言ふ也。竹帛に著せば、之を書と謂ふ。書なる者は如也。五帝三王の世に迄びて、改易して体を殊にするを以て、泰山に封ずる者、七十有二代にして、同じこと有る靡し。周礼に八歳にして小学に入り、保氏は国子に教ふるに、先ず六書を以てす。」

訳解……

「倉頡ははじめて字姿をつくった。思うに姿あるものは、その姿を文字にした。よってこれを文といった。のちに、この文に音をあわせた

形声の文字が増えて、これを字といった。字は、生れて次第に増えることを言うのである。竹や帛に書いたものを、書という。書とは如の意で、五帝三王の時代に及ぶまで、改め易えて書体を異にしていることは、泰山に封禪の儀式を行なう者は七十二代あったが同じものはない。『周礼』（注1）には、八才になると漢字を学ぶが、最初に学ぶのは六書（注2）であると記している。

（注1）段注には『周礼』に「周礼八歳入小学」の文がないことを指摘するが、『大戴礼』保傅篇に類似句があることから、また、保氏は『周礼』にあることから『周礼』と解している。

（注2）六書は、指事・象形・形声・会意・転注・仮借のこと。

3. 指事について

3. 1 『説文解字』序の本文……

「一曰指事。指事者、視而可識、察而可見（注1）。上下是也。」

（注1）段注本は「可見」を「見意」にする。他の諸本は「可見」にする。段注には『漢書』芸文志の顔師古注に依るとする。

訓読……

「一に曰く指事。指事なる者は、視て識る可し、察して見る可し。上下是れ也。」

訳解……

「一つめは指事である。指事というものは、視て識ることができ、察して見ることができるものである。上・下がこれである。」（図31a）
一番めにとりあげられた「指事」は、「上」や「下」の字のこととする。

る。これは、無形のを字にどのように表すかである。許慎は説明して「指事とは、目で見てわかり、考えてわかるものだ。」とする。つまり「上」や「下」には具体的な姿はなく、これを文字に象ったものが「指事」である。

「指事」には「上」「下」のほかに、「本」「末」などが挙げられる。

「上」は、横棒（一）のうえに短い横棒をのせたもの。横棒は、基準つまり考えの基本。そして、うえにある短い横棒で「うえ」という内容を文字にした。

「下」は、「上」を逆にしたもの。横棒のしたにある短い横棒で「した」という内容を文字にした。

「本」は、「木」のもとところに、短い横棒を加えたもの。上部は、木の枝が茂っている様。下部は、木の根がはっている様。「木」という字は、地上の枝に、地中の根を象っている。そして、その「もと」の根のところを短い横棒で示し、これで「もと」という内容を文字にした。

「末」は、さきほどの「木」のうえに横棒を加えた。「すえ」というと「しも」の方のような感覚があるが、文字の構造からは「こすえ」を指している。これで「すえ」という内容を文字にした。

4. 象形について

4. 1 『説文解字』序の本文……

「二曰象形。象形者、画成其物、随体詰詘。日月是也。」
訓読……

「二に曰く象形。象形なる者は、画きて其の物を成し、体に随ひて詰き」（注1）す。日・月はれ也。」

（注1）詰きは、詰屈に同じ。まげること。

訳解……

「二つめは象形である。象形というものは、画いてその物を表わし、形態に随つてまげる。日・月がこれである。」（図41a）

二番めに取り挙げられた「象形」は、「日」や「月」の字のこととする。これは形のあるものを、字に象つたもの。許慎は説明して「象形とは、かたちどつて物の姿をなし、ありさまにしたがつて筆画を曲げるものだ。」とする。つまり「日」や「月」の具体的な姿を文字に形どつたものが「象形」である。

「象形」には「日」「月」のほかに、「山」「木」などが挙げられる。

「日」は、丸（○）のなかに短い横棒を加えたもの。丸は、太陽の輪郭と月のように満ち欠けしない変化のない形。短い横棒は、丸のなかが充実しているさまを示す。一説には、太陽の黒点とするものがあるが論拠に乏しい。

「月」は、三日月の輪郭をとり、太陽とは反対に、満ち欠けするさまをかたちにする。一説では、輪郭のなかの短い縦棒を、月のなかの影とするものがあるが論拠に乏しい。

「山」は、三つの峰を象っている。

「木」は、前述の通り、木の幹と根を象っている。

5. 形声について

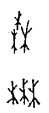
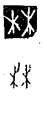











				甲骨文
				金文
				篆書
				隸書
森	林	信	武	楷書

図61a




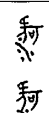














					甲骨文
					金文
					篆書
					隸書
河	江	山	月	日	楷書

図51a




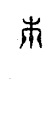













					甲骨文
					金文
					篆書
					隸書
末	本	木	下	上	楷書

図31a

5. 1 『説文解字』序の本文……

「三曰形声。形声者、以事为名、取譬相成。江河是也。」

訓読……

「三に曰く形声。形声なる者は、事を以て名とし、譬を取りて相成る。

江・河是れ也。」

訳解……

「三つめは形声である。形声というものは、物事に対して命名して形とし、譬を用いて声として出来あがっている。江・河がこれである。」

(図51a)

三番めに取り挙げられた「形声」は、「江」や「河」の字のこととする。これは、形(義のこと)と声(音のこと)を合わせ持つものである。許慎は説明して「形声とは、〈事〉と〈譬〉によってつくられている。」とする。〈事〉は音の部分、〈譬〉は意味の部分を示す。川をあらわす「水」(さんずい)の〈譬〉に、音をあらわす「工」の〈事〉をくわえたものが、「江」であり、こうしてできたものが「形声」である。

「形声」には「江」「河」のほかにも、「性」「情」などが挙げられる。

「江」も「河」も、川をあらわす「水」を持つているので、川の名前であることが判る。「江」は、長江を指す。(我が国では揚子江と呼ばれている)。「河」は、黄河のこと。ところで許慎は『説文解字』のなかで「工」や「可」の部分について、「音である」ことの他に説明していない。

「性」は、「心にしたがい、生の声(≡音)」としているだけで、やはり「生」そのものについては説明していない。許慎は「性」を説明し

て「人の陽気のこと。性とは善である。心にしたがい、生の声。」としているだけである。この「性」と反対の内容に「情」がある。「情」を説明して「人の陰気のこと。欲である。心にしたがい、青の声。」としている。

6. 会意について

6. 1 『説文解字』序の本文……

「四曰会意。会意者、比類合誼、以見指撝。武信是也。」

訓読……

「四に曰く会意。会意なる者は、類を比し誼(注1)を合して、以て指撝(注2)を見す。武・信是れ也。」

(注1) 段注には、『周礼』の注を取り上げて「今人は義を用い、古書は誼を用う。」とする。

(注2) 撝は、麾に同じ。指すの意。

訳解……

「四つめは会意である。会意というものは、類するもの比べてその義を合せ、そして指し示す。武・信がこれである。」(図61a)

四番めに取り挙げられた「会意」は、「武」や「信」の字のことだとしている。「会意」とは、字と字をあわせて、新しい意味内容にしたもの。許慎は説明して「会意とは、〈誼〉をあわせて、〈指撝〉をあらわす。」とする。〈誼〉は、意味内容のこと。〈指麾〉は、指麾におなじで「さししめす」こと。異なる意味内容を持つ字と字を合わせて、新しい意味内容(≡指撝)にした。

許慎は「武」を説明して「楚の国の莊王がいった、そもそも武というものは、勝敗がさだまれば兵をおさめることである。だから武器をとめることを武といった。」とする。「武」の字姿は、上部の「戈」に下部の「止」をあわせる。「戈」は武器のこと、「止」は「とめる」こと、これをあわせて「武器をとめること」を「武」という新しい意味内容にした。楚国の莊王の話は、『春秋』という中国古代の歴史書にある。『説文解字』序の末に、漢字を説明した内容の出典を『易』『書経』『詩経』『周礼』『春秋』『論語』『孝経』とするが、ここに『春秋』があり、これによって許慎の考えの拠り処が裏付けられる。

許慎は「信」を説明して「誠なり。人言にしたがう。」とする。「人」と、「言」は言葉のこと、これを合わせて「まこと」という新しい意味内容にした。

「会意」には「武」「信」の他に、「林」「森」などが挙げられる。許慎は「林」を説明して「平土に叢木あり、林という。二木にしたがう。」とする。「平土」は平野のこと、「叢木」むらがり生えている樹木のこと。許慎の説明では、平野にあるのが林で、山には林はなく、相当に苦心して説明している。当然の内容を言葉にするのは困難なことである。「二木」とは、ここでは「木」「木」をあわせたものという意味。「木」と「木」を並べて書くことで、「平野にむらがり生えている樹木」という新しい意味内容にした。

許慎は「森」を説明して「木おおき^な兒。林にしたがい、木にしたがう。」とする。「兒」は貌とおなじで、姿形のこと。こんどはずいぶん簡単に説明するが、平野とはいっていないので、許慎の考えには、「森」

は平野にも山にもあるようである。「木」と「林」を上部と下部に書くことで、「平野にむらがり生えている樹木よりもつと木がおおい」という新しい意味内容にした。

7. 転注について

7. 1 『説文解字』序の本文……

「五曰転注、転注者、建類一首、同意相受。考老是也。」

訓読……

「五に曰く転注、^{てんちゅう}転注なる者は、建類一首、同意相い受く。考・老是れなり。」

訳解……

「五ばんめは転注である。転注というものは類を建て首を一にして、おなじ意味の字が受けることである。考・老がこれである。」(図71 d)

六書の説明のなかでも最も難解なのが「転注」である。このことは許慎の説明があまりに短辞すぎることに由来する。「建類一首、同意相受。」の意味する処は、いまひとつ解釈に充分でない。このことから古来より複数の見解が出されて来たが、その見解を検討すると3説に集約される。これについて小川環樹先生の「中国文字の構造法」(平凡社『書道全集』第一巻)に詳述されている。要約は次ぎの通り。

3 説は、互訓説・字源分有説・引申説がある。

互訓説は、解釈するうえで、相手の字を用いて解釈しあうことで「考は老の意味であり、老は考の意味である。」とする考え方。

「老」の本来の意味は、腰をまげて髪を長くのばした人をあらわしている。また「考」の本来の意味は、長寿をたもつ、長生きをすることをあらわしている。『説文解字』「老」は「老、考也。七十曰老。从人毛匕、言須髮變白也。」（注1）また「考」は「考、老也。从老省丂声。」（注2）としている。段玉裁はこの互訓説を主張したので段注は「凡言寿考者、此字之本義也。」（注3）と解説している。寿考は長寿の意味。この説を唱えたのは戴震（1723-1777）に代表される。

字源分有説は、『説文解字』の各部首（いまの漢和辞典の部首とはことなり、五四〇部ある）に属する字が、その部首の字の本義を分有すること。この説を唱えたのは江声（1721-1799）に代表される。

引申説は、ある字の本義が変化して異なった意義に用いられるようになった時、なおもとの字をそのまま用いることで、本義はなれて派生した意義に用いること。この説を唱えたのは朱駿声（1788-1858）に代表される。

従来この3説が有力であったが小川先生は、私見としながらも最も優れている説として曾國藩（1811-1872）の見解を取り挙げている。曾は、形声と転注とを比較し異同を述べて説明する。形声と転注における同じところは、義符と声符を合わせて構成される合体字であること。異なるところは、合体字になったときに義符が省略した姿になっていないこと、また省略した姿になっていること。義符に省略がないものは形声であり、義符に省略があるものは転注としている。

『説文解字』では形声として「江」「河」を挙げ、転注として「考」「老」を挙げる。「江」「河」は「水」部に属する字であるが、このとき「水」が「江」「河」に義符として使われるものの姿に変化はない（図71a）。ところが「考」は「老」部に属する字であるが、このとき「老」が「考」に義符として使われるが姿は変化する（図71b）。

結論として小川先生は、互訓説・字源分有説・引申説の3説が字義について論じて構造法を離れていることから、曾氏に賛意を示している。

（注1）「老は考なり。七十は老と曰ふ。人毛匕に从ひ、須髮變りて白きを言ふなり。」人・毛・匕はそれぞれ老の篆書の部分をさす。（図71c）須は、あごひげのこと。

（注2）「考は老なり。老省に从ひ丂の聲。」老省は老の篆書の省略したかたちをさす。

（注3）「およそ寿考と言ふは、この字の本義なり。」寿考は長寿の意味。

8. 仮借について

8. 1 『説文解字』序の本文……

「六曰仮借、仮借者、本無其字、依声託事。令長是也。」

訓読……

「六に曰く仮借、仮借なる者は、もとその字無し、声に依りて事を託す。令・長これなり。」

訳解……

「六ばんめは仮借である。仮借というものはもとの字がないものを、おなじ発音の字を借りて意味を託することである。令・長がこれである。」(図81a)

「令長」は、県令と県長のこと。一万戸以上の県の長官は県令、それ以下の県の長官は県長をいう。許慎は「令」を説明して「発号也。从亠口。」(注1) また「長」は「久遠也。从兀从匕。兀者高遠意也。久則変化。亡声。亠者倒亡也。」(注2) とする。「令」は命令を発することとが本来の意味だが、このことから命令を発する人、また指令官の意味を含んで、漢代には前述の一万戸以上の県の長官をいうようになった。「長」は久しく遠いことが本来の意味だが、このことから長生きする人として老人を意味し、また年上から目上の意、かしらとしての統率者の意を含み、漢代にはさきほどの一万戸以下の県の長官をいうようになった。このように仮借は、字のもともとの意味で用いられるのではなく、別の意味に借用されることをいう。許慎の説明は、指示・象形・形声・会意では文字のなりたちを説明するのに対して、仮借は字の使用について述べたものといえる。

ところで『説文解字』の著者の許慎は、仮借の例として「令」「長」を挙げたが、このことに白川静氏は『漢字の世界』(注3)において反論している。要約は次ぎの通り。

『説文』が仮借とする用法は、いずれもその本義から拡大された、引伸あるいは転義といわれるものであって、仮借ではない。「もとその字なし」とは、たとえば否定の「ず」や「あらず」に用いる不・非、代名詞の「われ」に用いる我のように、本来その字を形

兀 元
匕 七
图81b

甲 骨 文	金 文	説文古文	説文籀文
雷	雷	雷	雷

图92a

甲 骨 文	金 文	篆 書	隸 書	楷 書
我	非	不	長	令

图81a

甲 骨 文	金 文	篆 書	隸 書	楷 書
考	老	考	老	考

图71d

水 部
江 河
義符 声符
图71a

老 部
考 老
義符 声符
图71b

毛 部
考 老
義符 声符
图71c

象化しがたいものである。不・非・我などは字の本義に用いることがなく、仮借義に専用する。

白川氏は不・非・我の本義をそれぞれ、『説文解字』から離れて甲骨文や金文の研究成果から独自の見解を述べて、不は花の萼^{がく}の象形字、非は非のかたちをした櫛の象形字、我はのこぎり歯のある切断の器の象形字とする。実際に不・非・我について文章のなかの文字の使用を調べてみても、不はもともとの意味である花の萼として使われた例はないし、非も同様にもともとの意味である非のかたちをした櫛として使われた例はない。我ももともとの意味であるのこぎり歯のある切断の器として使われた例がないことは同様である。このように、いづれも本義からは全くはなれて、音だけが借用されて否定詞や代名詞になっているものが仮借であって、「もとにその字なし」というのが、仮借字の原則と考えられる。

(注1) 「号を発するなり。△^{しやうせつ}に^したがう。」

(注2) 「久遠なり。兀^{こつ}にしたがい^ひにしたがう。兀は高遠の意なり。(ヒは)久ければすなわち変化する。亡の聲。亅^{けい}は倒亡なり。」

倒亡は、亡をさかさまにしたの意味であり、亡^{ぼろ}びないことをいう。

(図81b)

(注3) 白川静著『漢字の世界』1(平凡社 1976)一六頁

9. 始皇帝の文字の統一以前のようす

9. 1 『説文解字』序の本文……

「及宣王太史籀著大篆十五編、與古文或異。至孔子書六經、左丘明述

春秋伝、皆以古文。厥意可得而説。其後諸侯力政、不統於王、惡礼樂之害已、而去其典籍。分為七国、田疇異畝、車涂異軌、律令異法、衣冠異制、言語異声、文字异形。」

訓読……

「宣王^{せんおう}の太史籀^{たいししちゆう}は大篆十五編を著すに及び、古文と或いは異なる。孔子は六經^{りくきやう}を書き、左丘明は春秋伝を述べるに至り、皆古文を以^{もち}う。厥^その意は得て説く可し。其の後諸侯^{りきせい}力政して、王を統とせず、礼樂の害を惡^{にく}みて已^やめ、而して其の典籍を去る。分れて七国と為り、田疇^{でんちゆう}畝を異にし、車涂^{しゃと}軌を異にし、律令法を異にし、衣冠制を異にし、言語声を異にし、文字形を異にす。」

訳解……

「宣王につかえていた太史(官職名)の籀(注1)は、『大篆十五編』を著わすと、古文と部分的に異なっていた。孔子(注2)は六經である『詩経』『書経』『礼経』『楽経』『易経』『春秋』を書き、左丘明(注3)『春秋伝』を述べるのに、すべて古文をもちいた。その意味は理解して説明できた。そののち諸侯は武力をもちいてたがい^{たがい}に戦争をし、周の王を正統とせず、礼儀と音楽の害をいやがってやめ、そうして礼儀と音楽の書物をすてた。周の王室から分れて齊・楚・秦・燕・趙・魏・韓の七国となると、七つの国ごとに田畑は畝(耕地面積)を異にし、道路は軌(道幅)を異にし、律令(法律)は法を異にし、衣冠(装束)は制(制度)を異にし、言語は声(発声)を異にし、文字は形を異にした。」

ここでは、始皇帝の文字の統一以前の様子を述べる。周王朝は前1

1000ごろから前770までを西周、前770から前256までを東周と呼ぶ。また前770から前222までを春秋戦国時代と呼ぶ。この春秋戦国時代は、周王朝が弱体化して斉・楚・秦・燕・趙・魏・韓の七つの強国が天下を争った時代で、これを統一したのが後に述べられる秦の始皇帝である。

(注1) 生卒不詳、つかえていた宣王は前827から前782まで在位した。太史籀は、官名を省略し名前と一緒にして史籀とも呼ばれる。

(注2) 前551(一説に前552) - 前479。

(注3) 生卒不詳、孔子と同じころの人といわれる。

9. 2 「籀文」「大篆」「古文」について

中国古代文字の書体を説明する言葉に「籀文」「大篆」「古文」がある。『説文解字』によれば、「籀文」は前述の通り太史籀が書いた文字で、太史籀によって書かれたものが『大篆十五編』であることから、「籀文」と「大篆」は同じものを指しているといつてよい。「古文」は、これも前出のとおり太史籀の『大篆十五編』だけが古文と部分的に異なっていたとして、いることから「古文」と「籀文」は区別される。古来より秦の始皇帝の文字統一の以前のものを「籀文」「古文」と呼んだことから、金文(『鐘鼎文』)を指して「籀文」「古文」と称しているものがあるが、訂正されるべきことである。「籀文」「古文」は、『説文解字』の説明には書体として挙げているが、太史籀・孔子・左丘明の『大篆十五編』・六書・『春秋伝』は早い時期に失われていて、この「籀文」

「古文」を載せるのは『説文解字』に始まる。一例として「雷」を『説文解字』に調べると、古文・籀文を挙げているが、実際の周代の金文と比較して調べてみておなじスタイルのものはない。このことから周代の文字と、『説文解字』が載せている古文・籀文とは全くの別のものでありことがわかる。金文(『鐘鼎文』)を指して「籀文」「古文」と呼ぶことは誤であり、訂正されなければならない。(図92a)